

研究題目

カリキュラム・マネジメントにおける『小さじ一杯の工夫』
～総合的な学習の時間を核にした市立長野の挑戦～

目 次

- 1 研究の趣旨
 - 1.1 研究テーマ
 - 1.2 「小さじ一杯の工夫」に込めた願い
 - 1.3 研究のねらい
 - 1.4 研究の方向性
- 2 研究内容
 - 2.1 生徒の実態の整理
 - 2.2 課題意識
 - 2.3 実体験の可能性の発見
 - 2.4 中学2年生・Unit3の授業構想・7月
 - 2.5 Unit3におけるB生の姿
 - 2.6 7月実践の考察
 - 2.7 中学2年生・Unit6の授業構想・10月
 - 2.8 Unit6におけるC生の姿
 - 2.9 10月実践の考察
 - 2.10 その後の取組
- 3 成果と課題
 - 3.1 成果
 - 3.2 課題

<参考文献・引用文献>

長野県長野市立長野中学校

1. 研究の趣旨

1.1 研究テーマ

「カリキュラム・マネジメントにおける『小さじ一杯の工夫』」
～総合的な学習の時間を核にした市立長野の挑戦～

1.2 「小さじ一杯の工夫」に込めた願い

「小さじ一杯の工夫」という言葉は、国士舘大学教授の細越淳二先生が、運動課題のモールステップを創る際に用いている言葉である。¹⁾ 難しいことではなく、これまで行われてきたものに対して、ほんの少し条件を変えたり、再構成したりすることの重要性を端的に表現したこの言葉を耳にしたとき、不思議と勇気が湧いてくる。それは、立ちはだかる大きな壁に怯んでしまう我々が、まずは小さな一歩を踏み出す大きな力となる。教育活動全体の質の向上を図るカリキュラム・マネジメント²⁾の推進・充実という大きな課題に挑戦する市立長野の合言葉である。

1.3 研究のねらい（本校の未来）

本校では、学校教育目標「知・徳・体のバランスのとれた生きる力を持ち、国際的な視野に立って地域の発展に貢献する人材を育成する」の具現に向け、7年前の開校以来、探究学習「翼プロジェクト」を中核に据えた教育活動を展開している。その「翼プロジェクト」の最大の特徴は、実体験を重視していることである。洪水被害からの復興の歩みを感じ得する「農業体験」、自らの五感で地域の魅力を味わう「町探検」、東日本大震災を題材に未来を創る「東北修学旅行」等、各学年の実体験を大切に位置付け、生まれた「問い」から自分なりの答えを「主体的に」見付け出していく歩み、中高6年間を貫く学習が、「翼プロジェクト」である。

開校7年目を迎えた令和5年度、本校の未来を描くために着目したのが、以下に示す中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編³⁾の文言である。

このように、総合的な学習の時間において、各教科等で身に付けた資質・能力が存分に活用・発揮されることで、学習活動は深まりを見せ、大きな成果を上げる。（中略）一方、総合的な学習の時間で身に付けた資質・能力を各教科等で生かしていくことも大切である。（中略）各教科等と総合的な学習の時間とは、互いに補い合い、支え合う関係であることを理解することが大切である。

これまで6年間の歩みの中で、我々も感覚的にではあるが、各教科等で身に付けた知識や技能が、総合的な学習の時間において活用され、一層生きて働くようになってきたという成果を感じている。一方で、逆向きの矢印（総合→教科等）については着目が薄かった。しかし、課題に感じると同時に、本校の「翼プロジェクト」で大切にしてきた実体験が、各教科等の学習活動への意欲を高めたり、学習を促進したりするのではないか。本校がめ

ざす、「主体的に学ぶ姿勢の育成」に向け、実体験という強みを生かせるのではないかという希望も膨らみ、本研究をスタートさせた。

1.4 研究の方向性

上記の課題意識に立脚し、今年度の「小さじ一杯の工夫」は、実体験等の総合的な学習の時間の内容を、教科等に「広げる」こととし、研究対象を英語（外国語）科に絞った。理由は以下の2点である。

①学校教育目標の「国際的な視野に立ち」を受け、外国語教育が本校の特色の一つになっているため

②「翼プロジェクト」の内容として、外国語に関わる活動が位置付いているため

一さじ目は、学習指導要領の目指す「各教科等と総合的な学習の時間とは、互いに補い合い、支え合う関係であることを理解」した上で、「主体性」を主たる視点として、外国語という教科における効果や、今後の可能性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究内容

2.1 生徒の実態の整理

英語科では、本校がめざす「主体的に学ぶ姿勢の育成」を受け止め、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする生徒」の姿を願いこれまで研究を進めてきた。

これまで6年間の歩みの中では、様々な成果と課題が明らかになってきたが、「主体性」を視点として整理するために、図1⁴⁾に示された「粘り強い取組を行おうとする側面」（以下「粘り強さ」と「自らの学習を調整しようとする側面」（以下「自己調整」）の2側面に着目した。

二つの側面を視点に本校生徒の実態を整理すると、「粘り強さ」に関わる成果と、「自己調整」に関わる課題が明らかになってきた。

例えば、「話すこと [発表]」において、自分の考えや気持ちを伝えるために事前に準備し、練習を重ねるなど、言語活動のゴールに向けて粘り強く取り組む姿は、領域を問わず数多く見られる。

一方で、「話すこと [やり取り]」においては、自分の考えや気持ちが伝わるように何度も言い換えをしたり、相手が伝えようとしていることを理解するために聞き返したりするなど、粘り強い取組が見られるものの、さらに質問をして話題を広げたり、深めたりして、やり取りを続けていく等、自己の学習の方向性を調整していくことには課題がある生徒が多い。

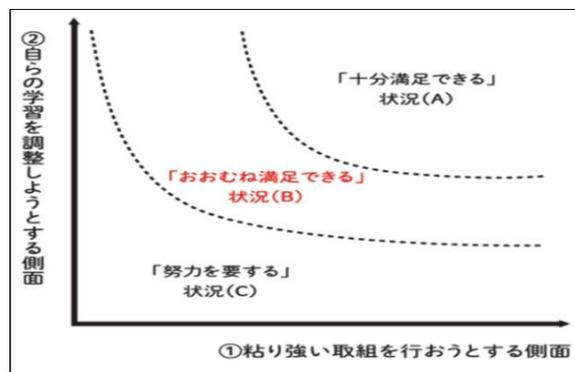


図1「主体的に学習に取り組む態度」の評価

2.2 課題意識

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語編⁵⁾には、以下のような課題意識が明記されている。

①「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないことや②「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど、③複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題がある。

これらの課題意識を基に、本校英語科職員で議論を重ねる中では、②③に関わる課題意識が多く語られた。特に、「やり取りの機会は潤沢であるが、1時間毎のコミュニケーションの目的につながりが薄く、生徒主体とは言えない時間もある」「領域を貫く目的意識が希薄である」等の意見が多かった。

2.3 実体験の可能性の発見（令和4年度の「善光寺ウォーク」の振り返り・5月）

英語科において実体験とは、どのような意味や価値があるのかについて、令和4年度の1年生の実体験「善光寺ウォーク」を題材に考えた。「善光寺ウォーク」は、本校の所在地である長野市の魅力の一つである善光寺を、生徒が調べ、その内容を外国人留学生に紹介する活動であり、1年次の「翼プロジェクト」の内容として位置付いている。議論の過程で着目したのが、図2に示す生徒のまとめスライドである。

第1回善光寺ウォークの様子



感想や学んだこと

- ・少し緊張して声が小さくなってしまったけど、だいたい伝わったと思う。
- ・留学生の方たちのことをしれたから楽しかった。

ふりかえり

- ・移動中沈黙が多かった。→自分から話しかけたい。
- ・ずっと紙を見てしまった。→アイコンタクトをとる。
- ・留学生の話すスピードが早く聞き取れないことが多かった。
- 聞く力をつけたい。「もっとゆっくり」とお願いする勇気を持ちたい。
- ・答えられない質問がたくさんあった。→事前に調べておく。

図2 A生のまとめスライド

図2の赤丸部分に注目してみると、そこには「願い」が記されていることに気が付いた。この「願い」という視点で生徒の振り返りを再確認してみたところ、9割以上の生徒の記述に記されていた。総合的な学習の時間においては、実体験から生まれる「問い」を大切に学習を展開してきたのと同様に、実体験から生まれる「もっと伝えたい」という強い「願い」を大切に英語科の学習を展開してみるという「小さじ一杯の工夫」を見いだした。

2.4 中学2年生・Unit3 Plans for the Summerの授業構想・7月（英語科における願いの定義）

「願い」を大切に授業を構想するにあたり、まず英語科における「願い」の定義（表1）を明確にすることから始めた。学習指導要領解説を確認してみても、願いという言葉は使われていなかったためである。似たニュアンスの「目的」という言葉は、随所に使われていたが、議論を重ねる中で一つ一つのコミュニケーションを行う「目的」の源となる大きなものが「願い」であると考え、表2のような単元を構想した。

表 1 英語科における「願い」の定義

「 願 い 」 と	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションを行う目的の源，毎時間の目的を束ねるもの ・実体験から生まれるもの ・複数の領域を貫き得るもの ・生徒が自己の学習を調整する目印 ・粘り強く課題解決に向かう原動力
-----------------------	---

表 2 単元展開 (Unit3 Plans for the Summer)

学習活動 Today's Goal (◆) と主な活動 (○)	
1	<p>◆留学生からのリクエストを知り，おすすめしたい観光地について自分の考えを整理しよう。</p> <p>○留学生からのリクエストを聞いて，単元の見通しをもつ。</p> <p>○おすすめしたい観光地はどこか，その理由を友達とやり取りする。</p>
2	<p>◆おすすめする観光地であることについて伝え合おう。</p> <p>○自分ならそこで何をするのかを友達とやり取りする。</p>
3	<p>◆おすすめの観光地でのエピソードを加えて伝え合おう。</p> <p>○おすすめする観光地でのエピソード（そこでしたこと，誰かから聞いたことなど）を伝え合う。</p>
4	<p>◆相手の好みに合わせて観光地を紹介しよう。</p> <p>○相手の好みを聞いて，その話題につなげて紹介する。</p>
5	<p>◆これまでに学習した表現を使って話題をつなげて，おすすめの観光地を紹介しよう。</p> <p>○これまでに学習した表現を用いて，友達と相手の好みや関心に合わせて話題をつなげ，やり取りする。</p> <p>○友とのやり取りを録画し振り返る。</p>
6	<p>◆留学生にわかりやすくおすすめの観光地を伝えるために工夫しよう。</p> <p>○前時のやり取りの録画を参考にして，留学生に分かりやすく伝えるためにはどうすれば良いかを考え，友達とやり取りをする。</p> <p>○友達とのやり取りを録画し，振り返る。</p>
7	<p>◆教科書 p.48 にある 2 人の交換留学生の自己紹介文を読んで，おすすめの観光地を紹介しよう。</p> <p>○交換留学生の好みややりたいことに合わせて，紹介したいことを整理して伝え合う。</p> <p>○交換留学生になりきって，友達とのやり取りを録画し，振り返る。※録画では何を話すのか準備せず，即興で行う。</p>
8	<p>◆留学生に English Camp で予定されていることを伝える準備をしよう。</p> <p>○Unit 3 のストーリーの内容を理解して，English Camp で予定されていることや自己紹介をして留学生が関心をもってもらえるようにメールの内容を考える。</p>
9	<p>◆留学生に English Camp で予定されていることを伝える内容を整理して，メール文を考えよう。</p> <p>○Unit 3 の p.38 のメール文を読んで，留学生にどんな情報を伝えれば良いかを考えたり，メールの書き方を理解したりする。</p>
10	<p>◆留学生に English Camp についてのメールを書こう。</p> <p>○整理した情報を元に，留学生との出会いに向け，伝えたいことをメールに書く。</p>
	○単元末の MINI テスト

本単元では，8月末に行われる2学年の宿泊行事 English Camp で出会う留学生からの「長野のおすすめの観光地を教えてください」というリクエストを受け、「その思いに応えたい」という大きな「願い」を出発点に展開を考えた。

2.5 Unit 3におけるB生の姿

留学生のリクエストに応えるという大きな「願いのもと、B生は「松本城の歴史に触れて欲しい」という具体的な「願い」を紡ぎ（第2時）追究を進めていった。第6時の終わり、偶然学校見学に来ていたカナダの高校生とやり取りをする機会を得たB生（図3）は、松本城について話し始めた。しかし、やり取りの冒頭で「松本城は先週訪れた」という相手の回答に出合ったB生は、一瞬周りを見ながら沈黙し、振り返り



図3 第6時の授業場面

では「悔しい」とつぶやいた。第7時、B生は自身のウェビングマップを見直し、松本城以外のおすすめとして考えていた美術館、食べ物にそれぞれ2、3と優先順位の数字をふり、「行ったことがある」という新たな分岐を増やした（図4）。

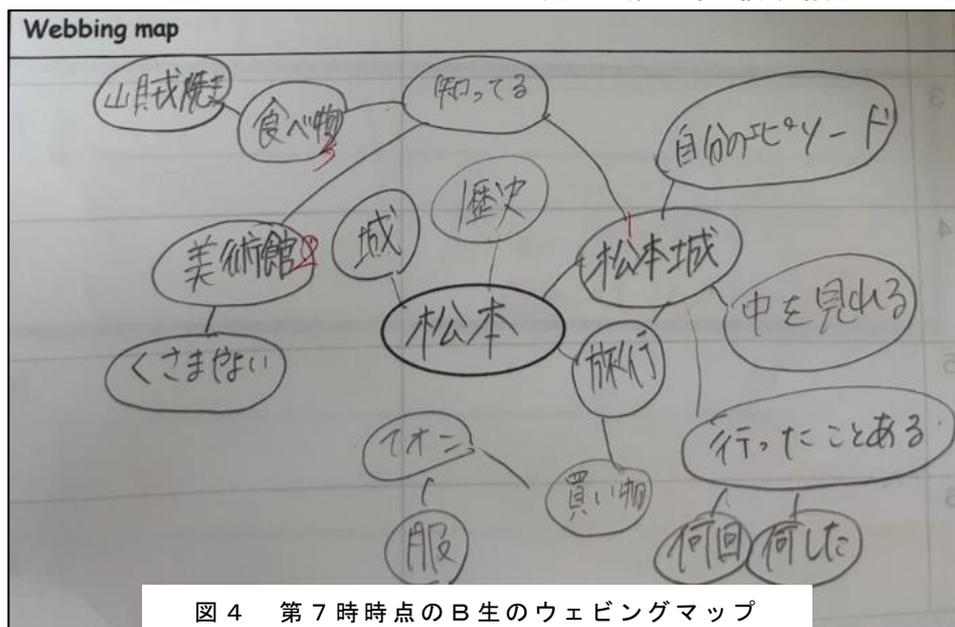


図4 第7時時点のB生のウェビングマップ

2.6 7月実践の考察（整理する活動の有効性）

English Camp で出会う留学生からのリクエストは、B生のみならず多くの生徒の関心を引き、Unit Goal という生徒の「願い」が自然な流れで生まれた。

第6・7時のB生の姿から示唆されたのは、「自己調整」力の育ちと「整理する活動の有効性」である。教師による授業後の聞き取り（第6時）に対し、B生は悔しさの内容として「相手意識の不足」を挙げ、次時以降の追究の見通しを語った。この姿を、本校英語科では「自己調整」力の育ちと捉えた。留学生のリクエストに応えたいという「願い」が位置付いた状態では、仮に結果が失敗であったとしても、その原因を分析し、次なる課題解決方法を考える力が本校の生徒には育まれているのだろう。

その際必要不可欠なのが、「整理する活動」である。我々は、B生がウェビングマップを更新した姿は、自身の考えを整理した姿であり、換言すれば「願い」の実現に向け、自身の現在地を確認し、自分の進むべき方角を「自己調整」した姿であると捉えた。この「整理する活動」については、中学校学習指導要領解説外国語編⁵⁾の中でも「考えなどを形成し、再構築する」際に行われることとして明記されていることも確認することができた。

2.7 中学2年生・Unit 6 Work Experience の授業構想・10月（願いの連鎖）

7月実践における生徒の育ちに触れた我々は、8月末の English Camp と9月末の職場体験学習という二つの実体験の価値を改めて考えた。その際大切にしたのは、「願い」の連鎖という視点である。これまで、Unit 単位で「願い」について考えることが多かったのだが、仮に結果が失敗であったとしても、その原因を分析し、次なる課題解決方法を考える力が本校の生徒には育まれているのだとすれば、もっと長いスパンで学びの連続性を捉える必要があると感じたためである。

English Camp については、留学生のリクエストに応えたいという「願い」が達成される場として点で考えていたが、達成感とともに次なる「願い」が生まれるようにプログラムを組み直した。具体的な変更点としては、最終日のプログラムとして、留学生が母国を離れてまで日本で学ぶ理由や描いている将来像、生き方等について、熱く語ってもらう活動を組み込んだ。その語りを聞いた生徒は、その熱さや生き方の素敵さに共感するだろう。同時に、その場で十分に質問をすることができない歯がゆさや、そもそも考えたことがない話題について英語で深められなかった悔しさも感じるだろう。新たな「願い」が生まれる瞬間である。

その「願い」を強くする機会が職場体験学習である。生徒は、実際に働くことを通して、「働くこと」や「生き方」について新たな考えをもつだろう。そこで教師は、本単元のゴールとして、本校の高校生と交流のある海外の大学で学んでいる大学生と「生き方」や「働くこと」「将来」について、互いの考えを伝え合う活動があることを紹介する。English Camp における留学生との同様のやり取りで、その場で質問をすることや、そもそも考えたことがない話題について英語で答えることに難しさを感じ、「悔しかった」と振り返りをした多くの生徒は、「今回は、もっと伝え合いたい」と願うだろう。その願いの実現に向け、マインドマップを活用して、一人ひとりの多様な「体験」や「将来の生き方」に関する考えや気持ちを整理する活動を位置付けた。単元展開は表3の通りである。

表3 単元展開（Unit 6 Work Experience）

学習活動 Today's Goal (◆) と主な活動 (○)	
1	◆ English camp で留学生と交流したことを振り返って、自分の「将来」について友達と伝え合おう。
	English camp での振り返りから、「やり取りを続けること」「留学生の生き方」について振り返る。
	○ English camp で使った、自分に関するマインドマップを使って、将来の自分について友達とやり取りをする。 ○ HLAB の大学生との交流までの単元の見通しをもつ。友達や留学生とやり取りしたいテーマを決め出す。
2	◆ 「将来やりたいことと理由」について友達と伝え合おう。
	○ 「将来やりたいことと理由」についてやり取りをする。
	○ マインドマップを使って、自分の将来に関する情報を整理し、友達と伝え合う。
3	◆ 「職場体験でのエピソード」を友達と伝え合おう。
	○ 職場体験で行った場所、体験したこと、学んだこと、感想を友達とやり取りをする。
	○ 自分が考えている将来に職場体験がどのようにつながるのか情報を整理し、友達と伝え合う。

	◆Kota, Eri, Tina, Hajin の職場体験でのエピソードを読んで、考えたことを伝え合おう。
4	○教科書 p.76～p.79 の登場人物の職場体験でのエピソードを聞いたり、読んだりして、考えたことを伝え合う。 ○教科書の情報から学んだことを整理し友達と伝え合う。
5	◆友達の職場体験のエピソードや将来について考えたことを聞いて、感想や質問を伝え合おう。 ○教科書 p.80 の登場人物の職場体験の感想交流の場面を参考に、友達に職場体験の感想や質問を伝え合う。 ○友達の職場体験のエピソードや将来についての考えから学んだことを整理し、友達と伝え合う。
6	◆My future について自分の考えや気持ちを伝え合おう。 ○My future について考えてきたことを整理し伝え合う。
7	◆My future について詳しく伝え合おう。 ○「My future」について考えてきたことを整理し、これまでに話したことがないペアと自分の考え、気持ちなどを詳しく伝え合う。
8	◆HLAB の大学生と「My future」についてグループでやり取りしたいテーマを決め、準備しよう。 ○これまでにやり取りしてきたことを元に、グループで HLAB の大学生とやり取りしたいテーマを決め、情報を整理し、グループの中で自分の考えを伝え合う。
9	◆HLAB の大学生と「My future」についての自分の考えや気持ちを伝え合おう。 ○HLAB の大学生とグループで決めたテーマについて、情報を整理しながら、質問したり、自分の考えや気持ちを伝えたりする。
10	◆友達や HLAB の大学生とやり取りしたことを元に、自分の将来について考えたことをレポートにまとめよう。 ○前時にやり取りしたことを元に、教科書 p.82～p.83 を参考にしながら、自分の将来について考えたことを chromebook に入力し、レポートを作成する。
11	◆自分の考えが正確に伝わるように、レポートを見直し、完成させよう。 ○前時に作成したレポートを、英語表現や文法の点から見直し、レポートを完成させる。
	パフォーマンステスト

2.8 Unit 6 における C 生の姿

表 4 は、本単元の学習における C 生の振り返りの一部（Teams を利用し、Excel に記入したもの）、図 5 は単元末に C 生が提出したレポートである。

表 4 C 生の振り返りの一部

1	もっといろいろな単語を覚えて話せるようになりたい。留学生と話したとき楽しかったから、もっといろいろな国の人と喋ってみたいと思ったから。単語を覚えると即興でも詳しく伝えられると思ったから。
3	将来についてマインドマップにまとめたり、知りたい単語や文を調べられた。どうしてその職業になりたいかを詳しく伝えられた。次はなぜその職業に興味をもったのか伝えたいと思った。
5	社会体験学習のことと結びつけて考えたいと思った。 株のゲームをして 1 位になれたことやトヨタで洗車をしたことを伝えられた。次は社会体験学習でこんな体験をしたから違う職業にも興味を持ったなど伝えられるようにしたいと思った。
6	社会体験学習のことと結びつけて伝えられた。どんなことに興味をもっているのか伝えることができたし、そのことについてトヨタでどんなことを学べたのか伝えることができた。
7	社会体験学習のことと結びつけて伝えられたし、そのことについて質問されたことについて詳しく返せた。順序に気をつけてスピーチできたし、ジェスチャーも混ぜてわかりやすく伝えられたと思う。次はもっといろいろなことを質問してその人がどうしてその職業になりたいのか聞きたいと思った。

9	勉強も大事だけど遊びはもっと大事にしていきたいと思った。いろんなことに挑戦して経験を積んで将来いろんなことにその経験を活かしていきたいと思った。
11	即興で質問を考えたり質問されたことにもっと詳しく答えて相手が興味をもってくれるようにしたい。

I want to be a pastry chef in the future. Because I like to make cakes. I can make chiffon cakes, canelés, roll cakes and marshmallows. Since I'm interested in the hospitality industry, I went to Toyota. At Toyota I learned how to interact with customers. I found it is difficult to treat people politely. I thought it was amazing how the people at Toyota treat everyone. Someday I thought wanted to be able to do it. I wanted to make use of what I learned this time.

図5 C生のレポート（原文ママ）

2.9 10月実践の考察

C生は English Camp での留学生とのやり取りを「楽しかった」と振り返り、本単元の学習に向け「もっと話せるようになりたい」という「願い」を記した（第1時）。同様の記述が多く生徒（35人中28人）に見られたことから、English Camp という実体験は、生徒にとって新たな願いを紡ぎ出す機会になっていたことが推察される。

各時間のC生の振り返りに着目すると、まずは「結びつけ」という表現が多いこと（第5・6・7時）に気が付く。加えて、話の順序や関連のさせ方に関する記述も見られることから、「考えなどを形成し、再構築する」際の手立てとして位置付けたマインドマップの有効性が示唆された。また、C生は「伝えられた」という自身の取組の成果や変容を捉えつつも、文末（第3・5・7時）には「次は」という書き出しで、次時の追究に向けた見通しを記していた。このC生の姿を、英語科では、実体験から生まれた「願い」を基に、自分の現在地を把握し、自己の学習の方向性を調整していった姿であると捉えた。

さらに、細かな記述内容を見てみると、単元前半には「伝えたい」（第3時）「伝えられるようにしたい」（第5時）という発信者としての意識が強くみられるが、単元後半には「聞きたい」（第7時）「質問されたことにもっと詳しく答えて相手が興味をもってくれるようにしたい」（第11時）という表現で、コミュニケーションの双方向性への意識を確認することができた。

また、第9時の振り返りや、レポートのまとめ部分に目を向けると、外国語という教科の枠を超えた「生き方」に関する記述を確認することができた。本単元が「話すこと [やり取り]」であることを考えれば、相手の立場に立って多角的に考える姿が表出することは当然かもしれないが、C生のように自分と同じくらい他者のことも大切に考える姿が見られたことは、本単元の大きな成果であった。そして、単元後半には、その意識が教科の枠を超え始めたことが、最も大きな成果である。このC生の姿を本校では、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編⁶⁾に示された「学んだことを現在及び将来の自己の生き方につなげて考え」た姿であると捉えた。

2.10 その後の取組

10月実践では、「話すこと [やり取り]」をメインに単元末には、「書くこと」に移行す

る複合単元に挑戦したが、11月にはオーストラリア出身のALTとその娘さんから海外の生活を「聞くこと」から始める単元を構想・実践した。海外の生活を聞き、日本との違いに興味をもった生徒たちは、「日本の学校生活を再考したい」という願いを共有し、「話すこと [やり取り]」の活動へと移行していった。やり取りを繰り返す中で、「校則の改革案をALTに提案して意見を聞きたい」という新たな願いを見いだした生徒たちは、今度は意見文を作成する「書くこと」の活動を進めていった。この実践から、特別な学校行事ではなくても、日々の活動の中に実体験を織り込むことが可能であることと、領域横断の新たな形が示唆された。

また、10月には長野県観光機構などが行う学校同士の国際交流事業として、台湾の中学生との交流の話が学校に届いた。本校では、大きな「願い」が生まれる貴重な機会であると捉え、展開を考えている。最初の出会いを大切にしたいと考え、12月には台湾から届いたポストカードを生徒に紹介し、「返事を書きたい」という願いを出発点に、学習を進めている。

3. 成果と課題

3.1 成果

本研究は、総合的な学習の時間で身に付けた資質・能力を教科等に生かしていくために、研究対象を英語（外国語）科として、生徒の主体性を主たる視点に、その可能性を探る実践研究であった。

研究を進める中では、主体性の中でも本校の課題である「自らの学習を調整しようとする側面」から、生徒の育ちの姿に触れることができた。7月実践からは、実体験から生徒の強い「願い」が生まれることと、「願い」が自分のものとして位置付いた状態においては、仮に結果が失敗であったとしても、その原因を分析し、次なる課題解決方法を考えるなど、粘り強く、自己の学習を調整できることを確認することができた。

10月実践からは、「願い」を基に、主体的に学習に取り組む生徒の姿に加え、単元後半には英語科という教科の学習を通して学んだことを、現在及び将来の自己の生き方につなげて考える姿に出会うことができた。総合的な学習の時間で身に付けた資質・能力を教科等に生かしていくという方向性をもった本研究の最後に、生徒の逆方向（教科等から総合的な学習の時間）の働きかけを確認できたことが大きな成果である。

最後に英語科の視点から本研究の成果をまとめると、実体験から生まれた「願い」を大切にしたい展開の中では、やり取り（コミュニケーション）を行う目的が明確かつホンモノであった。毎時間の目的に連続性が生まれ、生徒が本気で伝え合う姿に数多く触れることができた。また、「願い」を大切にしたい展開を考える中で、無理なく複数領域を統合した言語活動が行えるようになったことも大きな成果である。

3.2 課題

本研究の課題を端的に表現すれば、これは大きな研究の最初の一步にすぎないということである。

各教科等と総合的な学習の時間とは、互いに補い合い、支え合う関係であるとした場合、当然英語科以外の教科の視点からも、考察する必要があるだろう。

また、10月実践におけるC生のように、教科の枠を超えて自らの生き方を問い始めた生徒の育ちも、多面的・多角的に見つめたい。そう思ったきっかけが、生徒会活動におけるC生の変容であることに触れておく。11月に行われた生徒会選挙において、C生は会長に立候補した。周囲が一様に驚いたC生の決断の背景には様々な要因があるだろうが、「自分を変えたい。新たなことに挑戦したい。」というC生の演説と、10月実践の姿とが重なる。

今後、探究学習「翼プロジェクト」を中核に据えた本校がもつ可能性を、さらに広げ、深めるような実践と研究を継続していきたい。

<参考・引用文献>

- 1) 細越淳二（2021）.優れた体育授業を観る・創る特別編⑤「小さじ一杯の工夫」で子ども動きを高めよう！体育科教育 69（11） pp.76-77
- 2) 文部科学省（2017）.中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編 pp.40-46
- 3) 文部科学省（2017）. 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総合的な学習の時間編 pp.39-41
- 4) 国立教育政策研究所（2020）.「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 p.10
- 5) 文部科学省（2017）. 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語編 pp.40-46
- 6) 文部科学省（2017）. 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総合的な学習の時間編 p.12